

粉本展



48 十六羅漢図のうち

会 期

8月20日(木)～10月11日(日)

月曜日休館

鉄斎の粉本について

村越英明

粉本という言葉は、「手本」あるいは「下描き」といった意味で一般に使われているようで、ふつうは墨色で簡単に物の形を写した^{びんざい}体裁の作品資料を包括している。しかし詳しくいえばその内容はさまざまで、まずこれを語源的に訊ねたら、中国の方薰という人の「山静居画帖」に「画稿を粉本と謂うは、古人墨稿上に於いて粉筆を加描し、用いる時^ま撲ちて縑素に入れ、粉痕に依りて落墨す。故に之に名付く」とある如く、画稿を得る手段として始まったことがわかる。一方、明の董其昌が唐の名筆王維以下の古典を数多く写しとって手本とし、それを秘伝としたという話があり、この場合は

「以て臨模の粉本となす」と伝えられる。したがって中国では、粉本とは大まかにいって下

描きもしくは手本、の二つの意味があったとすることができる。

わが国では遠く平安時代に仏教図像を墨線で図説したものが珍重されたが、これなどは当時の仏画仏像の制作上必須の粉本であったと理解されているし、降って江戸初期の狩野探幽が古今の名画を意欲的に博覧し、それを画帖に模写した「探幽縮図」なるものも、やはりこの分野に入れることができる。この場合の探幽の目的は、自身の修業や古画に対する心覚えもあったろうが、立場上かかる名画を後日の参考とし、諸流を研究することによって一門の画技の向上を計ったことが推察される。狩野派がのちに、同派固有の流儀に束縛され、いわゆる粉本主義に陥ったのは、封建的な保守主義のなせる結果であり、この場合は粉本の意がきわめて狭義に解釈されてしまったからであろう。いずれにせよ、写真のない時代ゆえ、貴重な作品を記録にとどめたり、画技の修得を期してこれを模写したり、あるいは描法の手本の為に粉本は存在したのであった。

以上のように粉本という言葉の意味内容は、中国と日本、または時代によって若干趣きを異にするものの、本画(完成された作品)に至る為の過程の所産であり、したがってその目的により手段・



97 鷲図



40 芝仙竹寿図



92 頼朝像

方法にもいささか相異がある。たとえば名画を模写したもののならば、何よりもその画致、風韻といったようなものを的確に伝え、その特質までも表現しなければならないし、単に「覚え」としてならば、構図や図様だけを略写すればよく、反対に後世に伝えたい資料的価値を有するものならば、精確さがまず要求されるわけである。

今回の展示にみられる鉄斎の粉本は、その内容からいえば探幽のそれに近く、後日の参考の為に古画を模写したものと考えられることができるが、臨機応変の略写や、反対に丁寧・精密な写し、あるいは色名やその他、作品にまつわる「いわく因縁」などを註記したものなど、さまざまな表現の形をとっている。これらが自己の制作上、いろいろと役立ったことは勿論であろうが、鉄斎の場合は若くから画道に師を持たず、むしろ内外の

伝統的な画派画流の実作から多くのものを得ていたことから考えて、これら先人のあらゆる技法を学びとることも主要な目的であった、といえるだろう。したがってその対象の範囲はきわめて広く多岐にわたっていて、およそ古画の目に触れる機会は、ことごとく逃さずに写したのではないかと想像される。

鉄斎を近代画家として分類してしまうことには当然異論があり、その理由を端的に言えば、その生涯そのものが本来の文人のそれであって職業画家でなく、作品の内容もしたがってきわめて思想性の強いものであったからと論じることができるが、しかもなお、その画業の全貌は単なる文人画家の域を大きくはみ出していることも、万人の認めるところである。作品の主題の及ぶところと表現の豊かさは、この粉本類の多角的な内容にも充分語



64 鳥獣人物戯画

られている。展示に則してそれらを列挙すれば、まず日本美術史上の白眉でもあり、肖像画の名品として著名な頼朝像(92図)、小松内大臣(平重盛)像(32図)、或いは織田信長像(7図)などのそれらは、本歌が貴重なだけに特に注目されるが、その他の諸人物画についても、可能な限り真を伝え、その人物の性情をまでも写さんとした姿勢が窺える。また中国の人物あるいは山水・花鳥についても、それぞれ原本はきわめて水準の高いものに当たっていたことが判っている。しかも絵画様式からみれば、その範囲は仏画、大和絵のような伝統的なものから、江戸時代に継起した写生画、南画、そして風俗画や戯画のような作品までの拡がりを見せ、夥しい数量に達しているのである。それはそれぞれ、羅漢図(47,48図)であったり、観音像(15,22図)であったり、土佐光茂(70図)であったりするわけで、その他、若冲(97図)、文晁(21,96図)、華山(16,40,51図)、長春(33図)、米山人(1図)



33 小濃像

等々、見るものをして飽き

させないヴァリエティに富んだ展開をみせるのである。そしてそれらの描線の、のびやかに美しく、しかも原本をたちどころに彷彿とさせ、さりげなく特質をとらえる技倆にはあらためて感嘆しないではおれない。

これらの粉本類は長い間かかって鉄斎の画囊に貯えられたが、やがて逐次本来の画面に有形無形に生かされていったのであり、それらの関連をみていくことにも重要な意義があることは勿論である。一枚づつの制作年代についての証しは挙げられないものの、鉄斎が画業をおしすすめていく上で、これらは欠くべからざる過程であったから、大方は40歳代から50歳代に写されたもの、と推定されている。

(鉄斎美術館館長)



37 山水図

《出品目録》

番号	題名	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状	
1	嵐芝翫七変顔	岡田米山人筆	50代	43.5×52.7	紙本 淡彩	掛軸
2	板倉勝重	重像	不詳	55.0×32.0	紙本 淡彩	掛軸
3	印度史銅版画	(5枚)	不詳	(各)28.0×39.0	紙本 墨画	台紙貼
4	蝦夷人物	関	不詳	79.0×27.0	紙本 淡彩	掛軸
5	大伴旅人愛酒	田中訥言筆	不詳	40.0×57.0	紙本 着色	掛軸
6	小川可進	像	不詳	40.3×27.4	紙本 淡彩	掛軸
7	織田信長像	狩野元秀筆	不詳	38.0×26.7	紙本 墨画	掛軸
8	小野蘭山	像	不詳	40.0×27.0	紙本 淡彩	掛軸
9	海鶴蟠桃	沈南蘋筆	50代	107.5×45.0	紙本 淡彩	掛軸
10	柿人磨像	伝藤原信実筆	不詳	88.0×38.0	紙本 淡彩	掛軸
11	加藤清正像	中川寿林筆	不詳	27.0×37.0	紙本 淡彩	掛軸
12	蟹鴨	関	不詳	39.0×27.5	紙本 淡彩	貼交屏風
13	鴨	関	不詳	39.0×27.0	紙本 淡彩	貼交屏風
14	岩上観音	関	不詳	39.0×27.0	紙本 墨画	掛軸
15	観世音菩薩像	陳賢筆	50代	33.0×49.4	紙本 淡彩	掛軸
16	管夫人像	渡辺華山筆	不詳	54.0×39.0	紙本 着色	掛軸
17	菊地容齋	像	不詳	27.0×13.5	紙本 淡彩	掛軸
18	伎藝天女訶利底母	画	50代	33.0×165.0	紙本 淡彩	卷子
19	騎馬人物	関高隆古筆	不詳	39.0×27.0	紙本 墨画	掛軸
20	九霞墨戲	関	50代	13.5×419.7	紙本 墨画	卷子
21	漁樵	関谷文晁筆	不詳	77.0×51.0	紙本 淡彩	掛軸
22	魚籃観音	関	50代	130.3×74.0	紙本 淡彩	掛軸
23	孔雀	関窪田雪鷹筆	不詳	102.0×38.0	紙本 着色	掛軸
24	繫馬	関土佐光信筆	不詳	27.0×37.0	紙本 淡彩	掛軸
25	孝明天皇加茂行幸	関	不詳	27.2×620.2	紙本 淡彩	卷子
26	獄中	関河鍋暁斎筆	不詳	28.0×39.0	紙本 淡彩	台紙貼
27	五祖荷鋤	関牧谿筆	不詳	66.0×31.0	紙本 墨画	掛軸
28	小早川隆景	像	不詳	27.0×11.5	紙本 淡彩	掛軸
29	枯木鳥	関陳琳筆	不詳	27.0×37.8	紙本 墨画	掛軸
30	小堀遠州	像	50代	75.3×29.5	紙本 淡彩	掛軸
31	小堀遠州公墓碑文	50代	書 37.0×278.5 絵 32.0×44.5	紙本 墨画	卷子	
32	小松内大臣像	藤原隆信筆	不詳	136.0×112.0	紙本 淡彩	掛軸
33	小濃	像	50代	79.0×30.9	紙本 淡彩	掛軸
34	小瞽盲	関	不詳	53.0×39.0	紙本 淡彩	掛軸
35	佐川田壺齋	幽居	50代	47.0×63.6	紙本 淡彩	掛軸
36	三獅	関李竜眠筆	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
37	山水	関仇英筆	不詳	128.0×56.0	紙本 淡彩	掛軸
38	山水	関謝天游筆	不詳	80.0×53.0	紙本 淡彩	掛軸
39	三宝院男色	関湯舟の	不詳	28.0×39.0	紙本 淡彩	台紙貼
40	芝仙竹寿	関渡辺華山筆	不詳	110.0×33.6	紙本 淡彩	掛軸
41	詩仙堂	関見取	不詳	28.0×64.0	紙本 墨画	掛軸
42	紫柏大	関師	不詳	39.0×28.0	紙本 着色	台紙貼
43	柴船	関三熊思孝筆	不詳	39.0×27.0	紙本 淡彩	掛軸
44	釈迦如来	像	50代	83.8×39.4	紙本 淡彩	掛軸
45	集外歌仙	関	40代	29.4×334.6	紙本 淡彩	卷子
46	秋景山水	関汪葑筆	不詳	190.5×106.3	紙本 淡彩	掛軸
47	十八羅漢	関陳元藻筆	不詳	32.4×430.8	紙本 墨画	卷子
48	十六羅漢	関漢	不詳	(各)89.8×44.9	紙本 墨画	掛軸
49	寿星	関高克明筆	不詳	99.0×51.0	紙本 淡彩	掛軸
50	職人尽歌	関合絵師	不詳	26.0×38.0	紙本 淡彩	掛軸
51	人物	関渡辺華山筆	不詳	27.0×38.0	紙本 淡彩	掛軸
52	人物	関	不詳	40.0×27.0	紙本 淡彩	掛軸
53	人物騎牛	関海北友松筆	不詳	54.0×39.0	紙本 墨画	掛軸
54	菅原道真	像	不詳	49.0×35.0	紙本 墨画	掛軸
55	菅原道真	像	不詳	54.0×39.0	紙本 墨画	掛軸
56	西洋医祖秘父画像	石川大浪筆	50代	116.0×38.5	絹本 淡彩	掛軸
57	素描山水	関	30代	31.2×33.9	紙本 墨画	掛軸

番号	題名	年令	本紙寸法	材質・彩色	形状
58	蕎麦 天 図	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
59	大達 黒 天 像	不詳	38.0×26.8	紙本 墨画	掛軸
60	達 磨 図 顔 輝 筆	不詳	53.0×38.0	紙本 淡彩	掛軸
61	達 磨 騎 牛 図	59 頃	80.0×38.0	紙本 着色	掛軸
62	着 色 山 水 図	不詳	106.0×38.7	紙本 着色	掛軸
63	中 宮 寺 曼 陀 羅	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
64	鳥 獸 人 物 戯 画 鳥 羽 僧 正 筆	48	33.6×586.2	紙本 墨画	卷子
65	手 島 堵 庵 座 像	不詳	45.0×29.0	紙本 淡彩	掛軸
66	陶 淵 明 像	50 代	79.1×38.7	紙本 淡彩	掛軸
67	東 寺 辛 櫃 図	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
68	東 方 朔 像 祖 石 筆	不詳	70.0×46.8	紙本 墨画	掛軸
69	遠 山 衲 衣 略 図	73 頃	54.6×92.0	紙本 淡彩	掛軸
70	土 佐 光 信 像 土 佐 光 茂 筆	56	39.0×57.0	紙本 淡彩	掛軸
71	曇 鸞 梵 仙 經 図 紀 広 成 筆	不詳	81.0×50.0	紙本 淡彩	掛軸
72	名 和 長 年 像	不詳	28.0×39.0	紙本 淡彩	台紙貼
73	西 依 成 斎 座 像	不詳	39.0×27.0	紙本 淡彩	掛軸
74	鶏 白 描 高 僧 像	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
75	白 描 二 童 子 像	不詳	38.0×79.0	紙本 墨画	掛軸
76	芭 蕉 図 杉 山 杉 風 筆	不詳	26.8×38.0	紙本 墨画	掛軸
77	芭 蕉 図 杉 山 杉 風 筆	不詳	28.0×39.0	紙本 淡彩	掛軸
78	花 か つ み 燕 図	不詳	28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
79	富 士 山 図	不詳	27.0×38.0	紙本 淡彩	掛軸
80	葡 萄 図 沈 南 蘋 筆	不詳	114.0×57.7	紙本 淡彩	掛軸
81	薛 涛 図	不詳	35.0×25.0	紙本 着色	掛軸
82	法 隆 寺 壁 画 (2枚)	不詳	(各)28.0×39.0	紙本 着色	台紙貼
83	牧 童 図 杜 董 筆	不詳	27.0×38.8	紙本 淡彩	掛軸
84	布 袋 図 松花堂昭乗筆	不詳	33.0×24.0	紙本 墨画	貼交屏風
85	松 繪 釜 下 図	88	(各)64.0×59.0	紙本 墨画	掛軸
86	松 平 楽 翁 像	不詳	23.0×11.0	紙本 墨画	掛軸
87	松 永 貞 徳 柿 園 故 跡 図 南 涯 筆	50 代	51.3×59.3	紙本 淡彩	掛軸
88	武 者 図	不詳	26.0×38.0	紙本 着色	掛軸
89	梁 川 星 巖 像	不詳	48.0×30.0	紙本 墨画	掛軸
90	山 崎 烈 士 酒 宴 図 立 花 梧 庵 筆	不詳	53.0×39.0	紙本 墨画	掛軸
91	養 老 勅 使 図 高 隆 古 筆	50 代	131.5×42.5	紙本 淡彩	掛軸
92	頼 朝 像 藤 原 隆 信 筆	不詳	54.0×31.0	紙本 淡彩	掛軸
93	頼 山 陽 像 義 亮 筆	不詳	37.7×31.6	紙本 淡彩	掛軸
94	羅 漢 図 趙 子 昂 筆	不詳	40.0×27.0	紙本 墨画	掛軸
95	呂 洞 賓 像	不詳	117.0×54.0	紙本 淡彩	掛軸
96	驢 馬 図 谷 文 晁 筆	不詳	28.0×39.0	紙本 淡彩	掛軸
97	鷲 図 伊 藤 若 冲 筆	不詳	54.0×39.0	紙本 墨画	掛軸

出品作品は下記の通り二回にかけて展示いたします。

但し一部作品は重複することがあります。

前 期 8月20日(木)～9月13日(日)

後 期 9月15日(火)～10月11日(日)